
新月の空の下で

山下和男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新月の空の下で

【著者名】

山下和男

N2538M

【あらすじ】

「普通の平凡高校生の俺、高橋遼一。

ある日の塾の帰り、俺は非凡な世界へと引き込まれた……。

(前書き)

はじめまして！山下和男です。

この作品を投稿するにあたり、だいぶ前に書いた作品なので恥ずかしい部分や初々しいところがあつたりなんだりで…。

……と、ともかく、私山下和男の初作品をお楽しみくださいーーー！

ときには平凡な日々を過ごしてゐる中でふと特別を求めるものである。

俺も例外ではない。毎日特に意味も考えず生じてゐるとたまには刺激が欲しいものだ。旅行というのはその一種だと俺は思う。そのような特別な日々がすぎるとまた再び平凡な世界に引込まれるのである。しかしながら特別な日々も度を越せば嫌になるし、そういう日々に限つて長く続いたりするのだ。

失礼。紹介が遅れたな。俺の名前は高橋遼一。特徴も特にない高校2年だ。自分で特徴がないと言つるのは少し気が引けるが前の話と繋げるのなら特徴も特になといいう表現は適切であろう。クラスメイトの連中に聞けば大半がそう答えるのだから。実際聞いた訳ではないが、学力も平均、スポーツもそこそこ、身長も平均ぐらいであれば体型もよくみかける様な体型だ。

そんな俺がこんな話を突如するということは平凡な世界から特別な日々に連れて行かれてしまったからである。もし俺が変な好奇心に囚われなかつたら、平凡な人間だつたのに…。

その日も俺はいつも通りに高校へ行つた。そしていつも通り授業を受け、いつも通りのんびりと過ごしていた。

「まったく授業は退屈だぜ…」

「ほんとう寝てたお前が言つセリフじゃないだろ？…それでも成績上位つてのが腹立つ……」

「いっつはクラスメイトの山崎秀輔。ダラダラ感丸出しのくせに学力とか運動に関しては学年上位というなんとも憎たらしい奴である。こいつが何故俺に絡んでくるかは謎である。中学が一緒というわけではなく、部活も一緒にいうわけでもない。高2の最初に偶然席が近くよく話しそれ以来こんな調子である。

「なあシユウ。お前、永井と同じ中学だつたよな？」

「そうだけど、どうした急に? もしや永井に興味があるとか言う訳じゃあないだろうな。」

「はあ? 馬鹿いうな。ただ中学の時も休み時間はずつと寝ていたのか聞きたかつただけだよ。」

永井というのはクラスメイトの女子、永井咲姫のことである。シユウと違い、授業はきちんととうけてはいるが、休み時間はほとんど寝ている。寝ていない時は可愛らしい笑顔を絶たず、友達と話をしている。小柄で黒のロングヘアの娘だ。

「しようがないな。偶然3年間クラスが同じだったこの山崎秀輔様が教えてあげようじゃないか。」

「3年間も同じだつたのかよ! ?」

「まあな。中1のころは極普通の少女つて感じだつたな。休み時間に寝てる様なことはしてないと思つ。」「それじゃあいつ頃寝る様になつたんだ?」

「中3からかなあ。本人は夜受験勉強しているから眠いつて言つていたが最近もそうだろ?」

「中学よりも高校の勉強は大変だからじやないのか?」

「俺は勉強だとは思わないな。きっと夜に、ゴファ! !」

「そんな馬鹿げたことがあるかつての。お前じやあるまいし。」

「お、チャイムか。それじゃあ席戻るぜ。」

「また寝るなよ。次寝てたらチクるからな。」

「ははっ。勘弁してくれ。」

「

そういうとショウは席へと戻つていった。先生が着く頃には黒髪の眠れる少女は目を覚ましていた。

そんなこんなで学校の授業も終わり、通つていた塾の帰り。この時にすべてが始まった。

「はあ。これでやつと休める…。」

来年は大学受験だから今のうちに対策をと言つことで母が半強制的に俺に通わせているのだ。部活もろくにやつていないので宿題にこそ追われることはないが、正直勉強のし過ぎでノイローゼにでもなりそうである。こういう勉強の生活から抜け出したい気持ちというのが特別な日々へ浸りたい気持ちなのだろう。

ふと、路地のところから何かが聞こえた。最初は猫かと思つたが人の声と何かの雄叫びの様だつた。ただの猫の泣き声だとわかつていたら路地の方に行くことはなかつただろう。よく分からぬ音がすると気になつてその場へと行きたくなるものだ。何よりその行動が運命の歯車を動かしてしまつた。

路地の方に進むとなんとも薄気味悪い雰囲気を漂わせていた。さつきの音はまだ奥の方のようだ。しかし狭い路地がこんなに長く続くものだろうか。不思議に思いながら俺は歩き続けた。
何かがおかしい。電灯はない。だが景色自体が薄く光つていてるから暗いわけではない。

…景色 자체が薄く光っている?そんなこと日常的にあるだらうか?いやあるはずがない。

音は更におくの方から聞こえるがあまりの不気味な状況に足がすくんでしまった。

「…ん?」の声は……?」

どこかで聞いたことのある高い声。おそらく女性の声だ。だがどこで聞いたか思い出せないし誰の声かもわからない。

杉内……なわけないか。」

懐かしい友の名をあげて見たが当てはまりそうな人物はない。ただ懐かしい感じの声なのだ。

「…奥までいってみるか。」

この空間 자체正直怖いがそれよりも声の主が気になつて仕方がなかつた。聞き覚えはあるが、誰だか思い出せないもどかしさ。モヤモヤした気持ちをずっと持つてているよりも、先に進む方が気持ちは楽である。

路地に入つてからどれくらい時間が経つたのだろう。最初に音が聞こえたときはそんな距離があるとは感じなかつた。路地 자체も何kmあるかわからぬ長さとは思いにもよらなかつた。こういうときに限つて携帯電話の電源が切れているものだ。なんで昨日充電しなかつたのだろうか。結局必要なときになると使えない状況になるところなんとも携帯電話の意味を成していないことになる。

「そろそろか？」

激しい音に近付いてきた。人の声も聞こえる。どうやら人がいるらしい。更に近付いてみると、急に視界が開けた。そこはどうやら森の様な場所だった。何故か薄明るく、周りの景色がはつきり見えた。後ろに振り返ってみると森が広がっていた。

「……あれ？」

路地を歩いていた。長い路地を。しかし後ろにはあるはずの路がなくて、ないはずの森がある。そして聞こえてたはずの音や声が聞こえなくなつた。

「おい、お前！そこで何してる……！」

「へっ？」

突然、さつきの女性の声がした。驚いた俺は咄嗟に振り向いた。そこには……。

鬼のように鋭くにらんでくる眼、長い黒髪に赤い斑点のある見覚えのある制服、そして赤い液体が流れ落ちる剣。

「う、うわあああ～～！！！」

「おい、まて……！」

俺は歩いてきた路を急いで戻るつもりで走つて逃げた。日頃運動はしていないが、人間は危険にさらされるとすごい力を發揮するらしい、何百m、何十kmも走つた感じがした。それでも森から景色は変わらない。まだまだ走つて走つて走つた。この時ならメロスより

も早く走れたかもしれない。あの女は追いかけてきているかいないかわからなかつた。振り向くのがすごく怖かつた。

ドンッ!!

何かにぶつかり、思わず倒れこんだ。木にでもぶつかったのだろうか。それにしては弾力があつたような……。

はつとして、顔を上げた。嫌な予感がする。もしかして奴が……。

「グルウウアアアアーーーーー！」

ば、ば、化物だ！？獣のように毛深いが2足歩行でリーチの長そ
うな腕にナイフのような爪、顔は人のようで人ではなく眼は紅く餓
えていた。

「グルウウアアアア！」

恐ろしくて、あまりにも恐ろしくて体が硬直してしまつてゐる。ついには震えはじめてしまつた。

「く、来るなあ！」

無論その声は通じるはずもなく、その化物は俺に向かつて腕を降り下ろし、更に俺の体を突き刺した。

ああ、俺はここで死ぬのかな……。こんなところで死ぬなら好奇心だけで知らないところに来るんじゃあなかつた……。

「……！おいつ！遼——しつかりしろ……！」
「グルウウアアアア——！」

…わつきの女性か……？でも、俺、名前……。

「ちつ、ジランクの鬼にやられたか……。」「グルアアア……！」

鬼と呼ばれるあの化物の攻撃を簡単に見切り、一気に鬼の懷へと潜つていった。そして刀を力いっぱい振り上げた。

「飛翔豪烈刃つ……！」

「グアアアアア……！」

あの化物が簡単に斬り裂かれた。何なんだこいつは……。

「大丈夫かつ！遼ーーー遼ーーー！」

「……お……前は……永……井……？」

「……しつかりしろ！！大丈夫かつ！」

「……もう……遅そうだ……。……行つてくれ。」

最後にあつたのが永井とはねえ……。短かつたがいい人生だつたかな……。体が冷えていくこの感じ……。これが死んでいく感じかなあ……。

そして世界が闇へと閉ざされた。

不意に体が熱くなるのを感じた。中心部からだんだん周りに広がつていつた。体に熱いものが流れている感じだ。…もしかして地獄

に来たのかなあ……。

田を開けるとそこには和室の様な部屋だった。

「…………」リリが死の世界か……？」

それにしても生きてるときと変わらぬよつた氣もあるが……。

「お生憎だがここは地獄でも天国でもないぞ。」

…聞き覚えのある声がある。

「氣分はどうだ？」

「口調が違う氣もするが……。永井か？」

「ああ。聞かれたからこの口調を隠す必要ない。このままいいか？」

「ああ……。」

会話をすることがあまりなかつたが、口調が明らか違つことはよくわかつた。

「お前はあそこで何してた？」

「何つて……。路地に入つたら長い道のりが続いていて進んでいたら変な森に着いて、そして……。」

「なるほどな。偶然あの場所に迷いこんだと……。」

永井はため息をついた。すると押入れから何か棒状のものを取り出した。

「……受け取れ。」

その棒を俺に向かって投げた。何だろ？と思いつつもそれを受け取った。

「……これは……！」

「かつて私が使っていた刀だ。名は永勇。大切に使え。」

「な、なんで！？なんで刀なんか使わなくちゃならないんだ！？」

「……それは……。」

永井の顔が少し下へ向いた気がした。そして、彼女は下の方に目を向けたまま何かを押し殺したような声でいった。

「お前が鬼狩になつたからだ……。いや、なつてしまつた。」「……は？」

「なつてしまつた……？どうこうことだ？」

思つていたことが顔に出ていたらしく、すぐさま彼女はわけを話してくれた。

「なつたことに恨むのなら私を恨め。お前は鬼にやられたのを覚えるか……？」

「ああ……。」

赤い餓えた目、熊よりも長いであろう爪、そして獸のよつな体。あの化物のことを鬼といつのか……。

「肉は抉られ、体は貫かれ、酷い状況だった。」

……痛いで表現出来ない痛みが体中から感じとつたのは覚えていた。

まさかそんなに酷かつたとは…。

「もちろん応急処置はした。それでも回復する様子が見られなかつた。」

「…応急処置じゃあ確かに何となるわけないよなあ、…肉抉られてたら。」

「ん?じゃあどうやって回復したんだ?」

「死なせたくはなかつた。だから処置に私の血を使つてしまつたんだ…。」

「永井の血を使うくらい平氣だろ別に。確か血液型一緒だろ?」「鬼狩の血が体中に流れわたつたら普通の人も鬼狩となつてしまつんだ…!」

「え…。」

「鬼狩になると普通の人より回復速度が上がる。身体能力も上がる。しかし鬼を狩らなくてはならないんだ…。」

もう言葉が出なかつた。鬼狩になつたから鬼を狩る?馬鹿言え、凡人中の凡人のこの俺が普通の人と別次元のことをやることがあるのだろうか(…あるからこの物語はあるのだろうが)。「フオロ一はする。しばらく夜になつたらうちへこい。今、私ができる精一杯のことだ。」

「…狩らなければいけないのか?狩らなければ死んだりするのか?」「そういうわけではない。鬼狩はあの世界に勝手に引きずり込まれるだけだ。逃げようとすると二の舞になるぞ。」

「…もうなんだかあまりにも現実離れした話だ。本当に俺は鬼狩になつてしまつたのだろうか。」

「…今日はもう遅い。ゆっくり休め。」

そういうと永井は部屋を出でいった。

…「いつもおかしい。もつあの出来事が夢のよいつである。

家に帰ると俺の記憶が正しければ最低一日は経っているはずである。しかしあの日の夜の塾から帰ってくる時間だったのだ。体の感覚ではかなり時間が経っているはずだが現実では僅か数分のことになる。おかしい話だ。俺の感覚がおかしいのだろうか…。

「なんか浮かない顔だな。ビリした？」

いつも通りに高校へ行った。だがあの出来事が夢かどうか定かないから気分が晴れないのだ。

正直、気にしてくれたシユウに感謝したい。そのまま考へていたらそれこそノイローゼにでもなりそうだ。

「…なあシユウ。鬼とか化物とか現実にいると思つか？」

「…どうした？頭でも打つたか？」

「…いや、何でもない……。」

そのときだつた。廊下側から突然、俺を呼ぶ声がした。

「遼一くう～ん！ちょっとこいつち来てえ～！」

その声の主は俺が知つてゐる永井の声だ。なんだ、あの時のことば白昼夢だつたのか…。明らかに夜の時間だつたがそこは気にしちゃいけない。

俺がそんな思い込みをして廊下の方へ行つたら、幻想をすべて吹き飛ばすように思いつきり胸倉をつかまると、明らか女子高生離れした力で引っ張れた。

「ちよ、な、永井！？」

「気にしないでついて来てね」

さ、気にしないでついて…？明らかおかしいから気にするだろ普通

…

そりやつて体育館裏まで連れてこられた。

「最初に言つておく…。」

…あれつ？この口調つて……。

「鬼の話を易々と話すな。機密事項だ。」

…ああああ……。あのことは白日夢でも何でもないのかよ…。

「それと私以外の人とあまり接するな。巻き込みたくないならな。」

「なあ、本当に戦わなきゃいけないのか？」

もしあのことが本当なら、鬼狩になってしまったのが本当なら、戦わなきゃいけない。だけど話が急すぎる。こきなり戦えといふは俺はできるだけ避けたかった。

「…迷いがあるうちはまだ一人で戦うな。今夜から戦い慣れしてもらうために軽く修行する。」

「……わかつた。」

正直ショックが大きかった。情けない話だがあのことが本当というのを認めたくないらしい。理性が認めていても、本心はそういう非日常的なことを拒絶してるのだろ？

考えながら教室まで行くと、何だかざわついた雰囲気になっていた。俺が入ると、シユウが近付いてきた。

「なんだよ…。」

「なあ遼一。お前と永井つて付き合つてるのか?」

はあ?何言つてんだこいつ?

しかしながらこいつときつて大体タイミングがいい。俺にとつては悪いというのだろうが…。なんと永井が入ってきたのだ!

「お、丁度いーとこりにー。永井、お前にこいつと付き合つてたりするのか?」

あああああ…。シユウ、お前何空氣読めないことしてんだあ…。

永井はこいつにきて、いつも可愛らしい笑顔で、少し恥じらいながらこいつに話した。

「…実は昨日から…ね?遼一くん?」

…なんか空耳が聞こえる気がする。

「え、マジでかよーやるなあ、遼一ー。」

「ちょ、ちょっとまってー!」

誤解を解こうとしたら後ろがだんだん熱く…。

(痛い!痛いからつねるな永井…!)

(じゃあうんと言えーしますぐにだつ…!) (なんで言わなき

やいけないんだ!まさか本気つてわけじゃないだろうな!?)

(ば、馬鹿言えーそっちの方が2人で行動しやすいだろ!)

かなりの力でつなられてくる。背中の辺りにある贅肉が引きちぎ

れそうだ。我慢できないので俺は仕方ないとは思いながらも、まあいろいろと期待しながらも、認めることにした。

もう自棄だ…どうでもなれい…

一田中永井と付き合つてこるとこつのが本當がどつかとこつ質問攻めにあつた。今日は酷く疲れた。幸いにも今日は塾がない…。

「遼ーくーん、帰ろひー！」

「ちよつと疲れたから休ませてくれ…。」「それじゃあうち来なよーやつ行こいつ」

永井にグイッてひっぱられる。俺的にはグイッじゃなくてもつと適切な表現があると思つ。

「わかつたから元の張るのはやめぬ。」

永井はすつと手をひくと、廊下へ駆け出した。

「んじや、昇降口で待つてるね」

「いや、すぐ行くから咲姫はそこそこいる。」

「え……。」

一瞬永井の顔が固まつた。

「なんだ?名前で呼ぶのはまずかったか?そつちの方がカッフルっぽいからいいかなつて思つたんだが。」

咲姫は顔を赤らめるた。少し恥ずかしかつたかな…。

「「」がのとあせそれで呼んで…。」

「え…？」

咲姫は顔を上げると、花のよつにフワッと笑った。

「ほら、ボサツとしてると先行つちやうよーー！」

「つておいー待てよー！」

「うーん。どっちが本当の永井なのだろうか…。夜が本当なら咲姫は偽者となるし、今の姿が本当なら夜の姿は無理して出来た姿なのかなあ。形上とはいえ付き合っているわけだし聞いてみるのも手だよな。

茜色に染まる空の下、俺は久々にのほほんとした気分で過ごさせている。咲姫もそうではないのかなと思う。あの時からそんな時間は経過していないが、この笑顔は普段みせるよつなものではない気がする。

「「」が咲姫の家か…。以前俺が看病してもらつたとこか？」

「うん。あの時はちょっと時間軸がおかしくなつちゃつたけど…。」

「時間軸？」

「まあ詳しいことは中でね」

ということで和風の御屋敷つて感じの家へ入つた。玄関にきてふと思つたことがあつた。

「両親つて共働きか？」

俺は咲姫に言つたつもりだった。しかしそこには咲姫はいなかつた。

「何故そういう思い？」

「靴がないからや。靴箱はないし、しおりがないなら」にあ
るはずだろ？」

永井は俺の推測を見事にぶち碎いた。

「靴箱はあそこにある。そして母は働いていない。」

あ、じゃあ母親がいるのね。
ふと気がつくと永井は顔を下に向けていた。手にも力が入ってい
た。

「…どうした、永井…」

……でもこの家には私一人だ。帰ってくる親はない……。

「」

聞いてはいけないことを言ってしまったようだ。少し後悔した。

「私の新は…」
「いや、話さなくていい。辛いだろ…。」永井は顔を上げた。ほんの少し無表情に見えるがどこなく怒っている感じがした。

「…辛くはないから言わせてくれ。遼一には知つておいて欲しい。私が鬼狩になつたわけを…。」

…鬼狩になつたわけか……。少し、いやかなり興味深い話だ。何故永井が鬼を狩らなくてはならないか。知つておいて損はないだろう。…もしかしたら自分の戦う理由になるかも知れないし。

俺は首を縦に振った。それを永井はみる と俺を和室へ連れていった。

「2年前、中学3年のときだ。私は遼一と同じ状況になった。」

お茶を置きながら永井は言った。

「同じ状況？あの世界に迷つて鬼に致命傷を受けたのか？」

「そういう今ではないが…。」

永井は俺の真正面に座つた。そして懐かしそうな目で話した。

「私の両親は鬼に殺された。私の家は代々鬼狩の家系らしく、鬼を狩つていた。」

「…鬼狩つて何のために狩るんだ？」

「お前が歩いていた時空の狭間からこの世界に鬼が流れて出てくるときがある。人間に被害が出ないようにということで江戸幕府は陰で鬼狩という役職をつくり、人々が鬼に殺されないように、鬼を退治していたわけだ。」

そういうと永井は少しうつむいて続けて話した。

「私は親が夜遅く出かけるのを不思議に思つたから、尾行して何しに行つているか、確かめようとした。そして向こうの世界を知り、鬼の存在も知つた。しかし私があの世界へ行つたせいで両親は守りながら戦わなくてはならなくなり、A級の鬼に殺された。私はお前と同じように走つて逃げ、永井咲姫は一時死んだ。」

「一時死んだ？どういうことだ？」

永井は少し微笑んだ。

「体が冷たくなつていいく感覚。私はあの時を一時的に死んだ状態といつている。」

鬼に体の突かれ、傷口はすぐ熱くなるが周囲からだんだん冷えていく。あの時のあの感覚は忘れられないだろう。

「私は心中で死んだと思つた。体が完全に冷えたとき傷口からだんだん熱くなつて行くのを感じた。私が鬼狩になつた瞬間だ。」「鬼狩の血が流れたつてことだよな。」

「ああ。その場にその後の私の師匠と呼べる鬼狩がいた。その人が鬼狩の私を生んだことになる。」

「師匠か…。という」とは俺ら以外にも鬼狩はいるということになる。まあ江戸幕府が陰でつくったということほどである。

「剣もそこで?」

「ああ。鬼狩になるとかなり身体能力が上ると感じたのは修行のとき。1ヶ月いないで習得できただしな。おそらくお前もすぐに習得出来るだろう。」

「すぐに…か……。正直不本意だがやるしかなさそうだ。それに隠れメタボから脱却できそつだしな…。」

「よしーやりますかーー！」

俺がやる気を見せると、永井は少し笑い、顔に明るさが出てきた。

「それでは、武道場へいくとしよう。」

「田舎、脱隠れメタボーー！」

永井は顔をしかめた。しまった、つい本音が……。

「…………何のことだ?」

「気にしないでくれ…………。」

ちよつと悲しい気持ちになつた。

「脇が甘いーーもっと締めろーー。」

「うつ…ぐつ……。」

は、激しそぎる…。永井がこんなに力があるとは…。

「ゼエ…はあ…ゼエ…。」

何時間やつてこらのかな…正直いいまでやるとは思つてもないぞ。

この前まではほとんど体力なんてなかつた。マラソン大会でも後ろから数えた方が早いし、下手したら中学生の運動部にすら劣つていたかもしれない。そんな俺がいきなり木刀で体を動かすことになるんだから疲れるのは当たり前なのだが…。

「ふう。もうこんな時間か。それでは終わるとするか。」「

永井はそうこうと木刀を置きストレッチを始めた。

「遼一もやれ。疲れが残るぞ。」

俺は完全に疲れきつていた。このまま寝たいくらいだ。

「ま、マジっすか…？」

「大マジだ。疲れが戦いに支障を与え、自分を殺すかも知れないからな。」

仕方なしに俺は永井がやつているのを見て自分もやつてみることにした。永井は樂々やつているようだが、久々に運動した俺にはしないどかつた。

「7時か…。帰りの支度したら行くか。」「行くってどうに?」「どうつて決まっているだろ。お前の家へだ。」「はあ！？」、「こんな時間に上がりさせられないけど。」「上がるつもりはない。ただ送りたいだけだ。」「え？ なんで？？」

そういうと永井は笑い、当たり前という感じで言い放った。

「私は遼一の彼女なのだからなーー！」

辺りはもう暗くなっていた。室内で修行をしていたので周りの明るさはわからなかつたから二〇〇まで暗いとは思わなかつた。

「…帰り危ないから送なんくてもいいんだが…」

「平気平気！…帰りはこっちで帰ればお前も安心だろ…？」

少なくとも普段見ている永井よりも安心度は高かつた。…つてい
うか切替えが出来るのかよ！？

「…ちょっと鬼狩になつてよかつたなつて思い始めたよ。」

不意に俺がそういうと永井はどうして？っていう顔で見てきた。

「急にどうした？頭でも打つた…？」

「大マジでいつているんだ。こうして咲姫と帰れるわけだし、咲姫と話す事も出来るようになったしな。」

「…そう思つてくれてよかつた……。最初に向こうであつたときに逃げられたのを後悔しているから…。」

咲姫は一呼吸おくと、続けて話した。

「鬼狩は本当に大変だと思う。命も係わつてくるし…。普段から毎日狩らなくちゃって言うのはないけど、ゲートが開いたら急がなきや行けないし…。そんなことになつたのをよかつたつていつてくれたのは本当に嬉しいよ。」

「でもまだ実践してないからこれからが大変だな。」

星が輝く夜。かなり細い月だけでは照らしきれないから道の電灯がついている。こんなところを永井咲姫と一緒にいるこの特別な時間が長く続くと思つていた。

「じゃあ、ここが俺つちだから。送つてくれてありがとな。」

「遼一くん、ちょっとこっち向いて？」

何だろうと咲姫の方を向くと、咲姫は俺の頬に…。

「これからも、頑張りうね！それじゃあ！」

…咲姫は本気なのだろうか。いや、思い込みだろう…。

それは置いておいて、鬼狩になつたといつこと以外は充実して以前の生活が嘘みたいであつた。永井、いや咲姫と交友関係を持つ事が出来たし、2人ですごすなんて物凄い事まで経験出来了。

…」このときはまだわかつていなかつた。鬼との戦いの怖さを。そして鬼の真の力を

鬼狩になつて早くも1ヶ月経とうとしていた。剣術もある程度出来るようになつたし、体力も大幅に上がつたし、鬼狩としての力がついてきたなと思う。あれ以来まだ向こうの世界に行つていながら今ならきっと戦つていけるであろう。

「……はあ……はあ……。
「だいぶ…力…つけたな、遼一。」

かれこれ30分は戦つていただろう。鬼狩になつたばかりのころとは大違いだ。あの時は1分と持たず、永井に負けていたから30分やり合えたのは強くなつたと言えよう。

「…でも鬼狩んなくていいのか？」

永井は壁の方にあるボトルを取り、中にあるドリンクを口に含んだ。

「…ハッサー！安心しろ。鬼の世界のゲートが開くは新月の夜だけだ。あいつらは太陽光に弱いからな。」

「夜に太陽光？」

かなり変な話だ。夜に太陽光なんて存在するのだろうか…？

「月は自分で輝いているわけではない。太陽の光を反射させて光っているのだ。」

永井は得意そうに話した。確かに月は太陽の光を反射させているが太陽光と呼んでいいのだろうか？

「…さて、7時にもなつたし帰るとしますか。」

「そうか…。気をつけてな。」

あの1回だけだった。永井が家まで送つてくれたのは。学校とかじついうときは相変わらずだが、何となく間に線がある気がしてきた。

「…なあ、永井？」

「どうした？」

首を傾げて永井は尋ねた。…そんな顔されると言いつらうのだが……。

「最近、俺を避けてたりしない？」

思い切つて聞いてみた。さて、どう返答するのやら…。

「べ、別に避けてたりしておらん。避けていたりしておらん。避けていたりしておらん。避けていたりしておらん。避けていたりしておらん。避けていたりしておらん。」

まあ確かに。と納得しないのがそのときの俺。すぐさま攻めの一言を告げる。

「そういうのは人の目を見て言え。そういうときじゃないなくて……。」「避けておらんといったら避けておらん！何故私を信用しない！？」

「怒らせちゃったかなあ。避けてないとなると、きっと俺は思い違いしていたのかな。ただあと一言言つことにした。

「怒らせたなら悪い。信用していないわけじゃないんだ。俺の單なる思い違いみたいだから……。ただ一つ聞きたいけど本気つてわけじやなかつた？」
「……何のことだ？」

永井は手を背けて話した。嘘ついているのか？

「あまり詮索しない方がいいな。あいつが恋心持っているはずがないぞ。そもそもタダの鬼狩仲間でそれ以上でもそれ以下でもない。

だつたらあれは何だつたんだ？」

鬼狩になる前に戻れないだろう。ショウウとは話こゝにするが、前みたいにずっといることがなくなつたし、何かクラスメイトと距離がある氣もする。まあ永井とはそういうわけじゃないが。しかし体自体は確実に違うものになつている。オーラかなんかわからないけど、存在感が違つていて。たぶんクラスメイトが距離を置くのはこれが原因だと思う。

でもそんなこと考えている場合じゃない。今日おさらくゲートが

開く日なのだ。鬼が流れていかないように倒さねばならない。正直怖いし何故自分がとは思う。だが永井に恩返しという形で樂をさせてあげたい。そのためにも頑張んないと。

そう思つていた学校の帰り。突然永井が今日は休めといい始めた。

「たまには休んでよ。いつゲートが開くかわからないし、しばらくは自主練つてことだ。」

「なんでだ? まだまだ心配なんだが…。永井にも勝てないまま鬼が倒せるかどうか自信がないんだ。」

2度もやられるわけにはいかなかつた。俺にもプライドがある。永井の足も引っ張りたくないし…。

「自信もつて! 大丈夫だから。ちょっと私にもいろいろ準備があるから、ね?」

そういうと「ゴメンといいながら永井は駆け出していく。俺は準備する必要がないのだろうか。

「…とりあえず塾いくか。」

多少モヤモヤしていたが、なにもしないよりはましだった。ただし怖いのは塾の連中を巻き込む事だが、今日は心配いらないような、そんなんかんじのことを永井は言つていた。勉強に集中出来るとは思えないが、いくだけは行こう。やっぱりなにもしないよりはましだしな。

「…嫌な予感はするが…。」

護身用に永勇を持つて行こうか。剣道の帰りとか言ひとけば怪しまれることはないだろ？」

ただ、この予感が当たらなければいいのだが

予想は的中した。全くもって集中出来ず、終じこには永井が何やつているか気になり、更にさつきのことについて考えていたら苛立ちが生じた。行かないよいましとか思つてはいたが、ここまでくるとどうせもどうかと思えてくる。

ただ嫌な感じは残つていた。あの時の感じ。それに加えて苛立ちがあるわけだから気分はかなり悪い。よけいに機嫌も悪くなる。そういうふうに感情が揺れ動く中、あの時の、あの場所にきた。そうだ、ここですべてが始まったのだ。

「ここ」の路地、前まで気にしなかつたけどあれ以来なんか薄意味悪い雰囲氣出している気がする……。

路地に近付いてみた。その先は暗くてよく見えない。どうせ何もないのだろう。そう思つて帰らうとしたそのときだった。

「グルアアア！」

…あの声が後ろから、つまり路地から聞こえたのだ。あの声、そう鬼の声である。

「またここにゲートが…？」

以前は一般人、それも極普通のだ。ただ今は違う。鬼狩だ。

「…永勇を持ってきて正解だった！」

バックを見えなさそうなどころにおき、永勇を片手に奥に向かつて走つていった。

あの薄く光つてゐる道を走り抜ける。かなりの距離があるが、今では走り抜けることは容易いことだ。どんどん進んでいく。あの場所に近付くにつれて、鬼の声が大きくなつてくる。あの少女の声も聞き取れた。

「…！永井もいるのか…。」

ならばもつと速く走らないと。スピードをあげ、更に奥へと進んでいく。

急に景色が変わつた。あの森だ。しかしあの少女の声が聞こえない。前に来たときもそうだつた氣がする。ならば探すだけだ！

「グルアアア！」

「…！出たな鬼…！」

鬼が長い手を振り下ろした。すぐさま抜刀して、振り下ろした手を横へといなし、攻撃に移る。

「今までの俺と同じと思つな！」

刀を両手で持ち、思いつきり振り抜く！

「一閃業陣斬！」

「グアアアアア！」

鬼は腹部当たりで上下に分かれた。おそらくCランクだが、実践で一体を倒せたことに少し安心した。

「次つ！」

Cランクの鬼がゾロゾロ出て来た。…無傷での勝利13%！

「はつやつせつ！」

「グルウウアアア！」

鬼と鬼の間を抜くときに脇の辺りを切る。致命傷とはいかないが、多少動きが鈍くなるはず！

「…つたぐ、数が多くぎるつつの…」

次々と出てくる鬼たち。永井はこんな中狩っていたのか…。斬つても斬つてもこれじやあきりがない。

「グルウウアアア！」

「よつと食らうかよ！」

鬼の攻撃を間一髪でかわす。かわしたところで着地する前に鬼の攻撃がくる！これは直撃だ！！

「グラアアアアア！」

きつぱりのところで刀で防いだが、足がついていないわけだからそのまま地面に叩き付けられる。背中から思いつきり、だ。

「うぐっ！」

下はもちろん畳でないからダメージは半端ない。ただすぐ起きないと次の鬼の攻撃はよけれない。起き上がる反動を利用して、後ろへ飛ぶ。もちろん意味がないわけじゃない。着地した反動で更に加速し、鬼の集団へと突っ込む。

「うおおああ！一閃突撃刃！！」

偶然正面にいた鬼の胸部に突き刺さる。すぐに抜き、倒れていく鬼を踏み台にし体を捻って刃を外に向け、体を一気に回転させる。

「遼一オリジナル、スパイラルハリケーン！！」

完全に外れている名前だ。気分で名付けた自分が恥ずかしいが、周りにはいない！ 気にしなくともよいのだ！！

不特定多数に斬撃を当てたので、鬼は腕なしや、かなりの量の血を流しているものもいれば、目が斬れて暴れているのもいるし、足が斬れてしまっているのもいる。とりあえず作戦は成功したといえよ。

「恨むんだつたら俺を鬼狩にした奴を恨みな……やつ！たつ！はつ！」

そのような鬼たちのトドメをさす。相手はほぼ戦闘不能だからト

ドメは楽にできた。もうこの辺りの鬼は大体狩れたかな。ちょっと怖かつたけど、ちゃんと狩れたからよかつた。

「…鬼狩にした奴恨めつてことは永井を恨めつてことだよな。なんか悪いこといつた気がする。」

「そういえば永井は来ているのだろうか。ちょっと移動してみるか。」

最初にあつた鬼の集団以外に鬼にあわない。全然あわない。もう会う気がしない。あれが全部だつたら楽すぎないか? そしたら修行の方が大変な気がしてきた。

「クハハハハ! 所詮その程度のものか!
くう! なめるな鬼風情が!!」

「永井と他の人の声が聞こえた。どうやらこの辺りにいるようだ。
とりあえずいつてみよう。」

「無様だなあ、鬼狩になつてまでも生きようとするその姿…僕には到底理解出来ないね。」

「五月蠅い黙れカス!! 一度とその口聞けないようにしてやる!!」

「活きがいいねえ~。可憐な少女がいつセリフじゃないだろうがね。」

「

一人は間違いない永井だ。永井が男に刃を向けている。ただその男…。かなりきつそうな永井の顔を見て笑っている男は容姿は人間だ。ただ何か、その男が持っている、オーラか何かが人間外の別のものと悟っていた。

「…まあいい。そこにいる少年。出でなよ。」

男はこっちの方に手を向け、手を上へと上げた。次の瞬間、地面が持ち上がるかのように宙に舞い、2人がいるところへ落された。

「うわーとー」

普通の人よりも身体能力は上だから、体を宙で回転させて着地することは楽だったが…。

「遼ー！？何故ここにいる！？」
「何故つて鬼狩だからだろ！」
「なら速く逃げろ！いますぐにだー！」
「逃げるつて！？俺も鬼狩だ！なら一緒に戦うべきだ！」
「ふざけるな！相手を考えろ！あいつはAランクの鬼なんだぞ！なつたばつかのひよっこに何ができる…！」

永井がそういふと鬼の男が嘲笑つた。

「ハハハハ！賢明な判断だ！流石は永井の娘だ！…自らを犠牲にするその姿、美しいじやないか！！」

「永井の娘…って……？」

永井がいつていることに熱くなっていた俺だが、鬼のこの言葉で熱が冷めた。

永井の親は鬼に殺された。永井の親を知っているこの鬼は

「な、永井？もしかしてこの鬼が……。」

永井は表情に憎悪が表れていた。刀を握っている力もかなり強くなっているようだ。

「あいつが…私の両親を殺してAランクに成り上がった、鬼だ。」

そういうと永井は構えた。眼は憎しみに染まり、表情は怒りに変わり。こんな姿の永井は今までに見たことがなかつた。

「まあ、あの時は運がよかつた。鬼狩のなかでも名の知れた実力者に押されつ放しだったとき、偶然可憐な少女が表れたからね。出てきてくれなかつたら僕はAランクになれずに死んでたなあ。」「だつたここでくたばつちまええええっ！」

永井は叫ぶと鬼に向かつて真つ直ぐに突進していった。

「おやおや。でも僕、まだ死にたくないからなあ。怒りで周りが見えてないお嬢さんにまた同じ苦しみを味わせますか。」

そういうと鬼は右手を前にだし、そこから靈氣か何かの波動を放つた。もちろん突進している永井へとだ。永井は攻撃がくると分かつた途端にステップをいれて、簡単に回避した。そしてそのまま鬼の右手に向かつて刃を振り下ろした。

「ふ、まだまだ。」

鬼は右手を永井の刀に向かつてふつた。永井の刀に当たつたときはその手は刀を持っていた。永井の刀に当たつてはいるが、その刃は永井の頬に斬り筋をつけた。

「後ろにまわつたら斬れると思ったかい？」

「…今だ、逃げろ遼一…！」

永井は俺を逃がすためにわざと後ろにまわつたらしい。この隙をつけば、逃げられるが…。

「……永井を……永井咲姫をおいていけるかああ！……」

俺は構えると、鬼に向かつて突つ込んだ。今まで以上のパワーを、この永勇に込めて！！

「うおおああ！一閃突撃刃！……」

「一直線に突つ込んでくるとは、命知らずだなあ！」

鬼は左手で先ほどの倍の力で氣を放つた。俺は勢いをだんだん増して突撃していたからよけられるはずがなかつた。

「うぐふえ！」

ふざけて殴られたときの声みたいだ。だが発した声からは想像出来ない、かなりのダメージを受け、吹き飛ばされた。1mとかそこらではなく、軽く10mは飛ばされていた。

「遼一つ！」

「他人の心配している暇があれば自分の状況を考えたら？」

鬼は右手で刀をはらつと、永井の胸倉をつかみ、俺がいる方へと投げ飛ばした。

もうかなりのダメージを受けて半分瀕死な俺だったが、飛ばされた永井を受け止めた。

「う、ぐ……。」

「遼一！無理するな！もし死んだら…！」

こんな状況でも永井は俺に逃げるというのか。まあまだ俺はなつたばつかで実践経験もないし、頼りないかもしね。それでも…。

「別に死んだら死んでもいい。この世で一番大切なやつをこんな危なつかしいとこにおいていけるかよ…！その方が死ぬより辛いわアホ。」

口から赤くなつた痰を吐き、立ち上がる。そう、鬼狩になつたら鬼狩なりにいい人生を歩みたい。例え短くとも、大切なモノを守らず逃げるよりずつとましだ。

「…遼一…。」

「茶番は終わつたかい？安心しなよ、2人まとめて逝かせてあげるから。」

鬼は両手を前にだし、開いていた手を握つた。途端に俺たちの場所が爆発した。

「……どうだ…？」

さつきの爆発で砂埃が発生し、鬼は前方の視界がわからない状況だつた。辺りを見回す。鬼の警戒心は最大に達していた。

「そこだ…！」

「一閃烈波刃…！」

「は、そんなの食らうとでも！？」

しかし俺はニヤリと笑つた。鬼は完全に忘れていたのだ。それな

のに右手で攻撃を防ぎ、左手で俺の方へと攻撃を加えようとしている。今が好機だ！！

「……じゃあね……。」

「それはこっちの台詞だつ――！」

「剛爪烈波斬つ――！」

鬼の背後から突如永井が出てきた。砂埃で隠れていたのだ。その永井の渾身の一撃を鬼はガード出来ずその身に受け、左手が吹き飛んだ。

「グアアアア――！」

「片手じやあ防ぐのやつとだろつ――これで樂にしてやる――！」

俺は再び鬼と距離を置き、一気に突進していった。

「一閃突撃刃――！」

その一撃は鬼の右手、胸部へと突き刺さる。鬼は悲鳴もあげることもなく、その場へ倒れこんだ。

「……マサカ……スナボコリヲリヨウスルトハ……。マイツタナア……モツトイキテタカツタノニ。ナガイガニゲズニイタノガヨソウガイダツタ……。」

鬼は壊れた機械のようにカタコトで話した。この鬼はもう死ぬだろうか。ただこの鬼の姿が怖くて仕方がなかつた。

「マア……イイ……ヤ。シヌナラ……シヌ……デ……イッシヨ――。」

鬼の右手が動こうとしたそのとき、鬼の頭と腕が斬られた。永井が斬ったことにより、その声は止まつた。

と、同時に泣き声が付近で聞こえた。その声の正体は永井であった。

「…おい、どうした！」

「本当は…本当は遼一に死んで欲しくなかつただけだつたのだ……。大切なヒトが死ぬくらいなら、誰にも何も想われてない私が犠牲になればいいと思っていたのだ……。」

うつむいて泣きながらも永井は話した。

「…鬼狩になつたとき、すぐくつらかつた…。鬼を退治するために毎日鍛練、この世界にくれば鬼を狩る……。普通の人じやない生活から逃げ出したかつた…。でも…でも、遼一が…遼一が鬼狩になつてからは楽しい日々だった。本当に楽しかつた…。遼一が強くなるにつれて、こういう鬼にも構わず戦う気がして……。」

永井は突如崩れ落ちた。握っていた刀も永井の手から離れた。崩れ落ちた永井を俺は受け止めた。

「うわあああん！大切なヒトが死ぬのが嫌だつただけなのだ…！…！ただ…それだけだつたのだ…！」

泣き叫ぶ永井。そんな永井、いや永井咲姫を俺は抱き締めた。

「俺は…俺は永井、永井咲姫が大切なヒトだ。大切なヒトを失う怖さはお前も分かるだろ？…互いに失うと怖いんだ。だから自分を犠牲なんて絶対に言つな…。俺は…俺はこれからもこういう生活でもいいから咲姫と一緒にいたいから…。」

「う…、ひく…、う…、うわあああん…」

そしてその永い夜は明けた。

平凡な世界から特別な日々に連れてこられた俺だが、まあ悪い生活でもない。前と変わらず学校へ行き、シユウとか咲姫とかクラスの連中とふざけたり、はしゃいだり。もちろん学生の本分の勉強だつてしまふなりとやつた。

「…ふう。」それで課題終わひとつ。

机に向かっていた俺は伸びをして、更に欠伸までした。そして、机の上にある大切なヒトとの写真を眺める。

不意に窓からコツコツと音がした。何だろうと思い、カーテンをあけたらそこにはある人がいた。窓を開けると彼女は部屋へと入つていった。

「どうした? この時間に?」

「どうしたも!うしたもない。今日はゲートが開く日だろ? セッセと準備しろ。」

黒髪の少女は少し怒りながらも言った。

「今日だつたのかよ。先言つてくれればよかつたのに。言わなかつたら言わなかつたで先行くとか……。」

永井は笑いながら、そして半分照れながら言った。

「一緒に行かなきゃ意味がないだろ？が。私とお前はずつと一緒になのだからな！」

(後書き)

なんかベタな落ちなよつな違つよつな……。

続きが書けそうな作品ですが、この先が思い付かなかつたので短編にさせていただきました。

皆さんどうのよつなじ感想を持たれたのやひ……。

高橋遼一に永井咲姫、シユウや途中遼一がいついていた名前が別の作品で脇役として出て来るかも知れません。

さて、次回の作品の作成に取り掛かるとしますか……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2538m/>

新月の空の下で

2010年10月15日23時00分発行